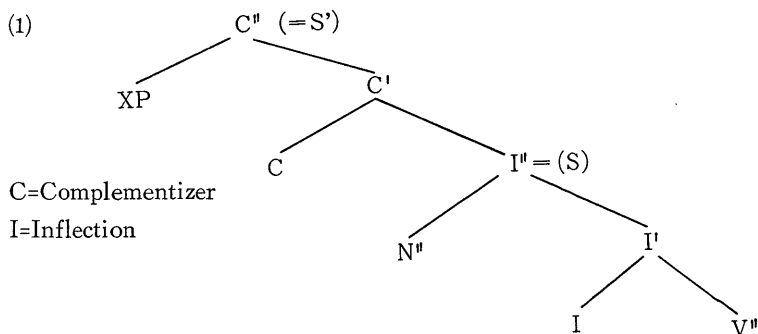


# NP 移動をめぐって

岡 本 庄 三 郎

Chomsky (1981) で提示されたいわゆる GB 理論では従来の変形分析概念や諸制約が改廃されて、いくつかの原理原則に統合され、モジュール化されて、普遍文法の構想が一層明確化してきた。本稿では NP 移動とそれにかかわる問題点を指摘し、この段階では結局移動における  $\bar{S}$  削除の問題が残されてくることを考察する。

1 GB 理論では、内在的な、あるいは形態的に派生した語彙特性が NP 移動の要因をなし、伝統的な変形のもつ重要性は減少し、かわって統率と束縛、格付与、 $\theta$  役付与などの概念が重視される。受動文を例にとると、伝統的には概略、(i)文頭の NP を後方に移動し、その前に by を置く。(ii)動詞の直後の NP を文頭に移す。(iii)動詞を受動分詞に変える。(iv)助動詞を be を挿入する、といった操作を行なった。GB では格フィルターにより、音形をもつすべての NP は格をもっていなければならない、この格は統率要素の動詞、前置詞あるいは AGR (AGREEMENT の略) によって NP に付与される。ところで Chomsky (1986b) によれば節構造は概略次のようになる。



AGR は上図 I の構成要素であって、主語位置にある NP を統率し、動詞との一致を示す形態をとる。NP は意味的に空な主語位置、つまりいかなる述語によっても  $\theta$  役を付与されない非主題的位置にのみ移動することができる。このことから、意味的内容をもたない虚辞的 (expletive) な *it* や *there* はこの位置を占めることができる。

- (2) a. It appears that he is wise
- b. There arose a difficult problem

かりに NP が、ある  $\theta$  位置から他の  $\theta$  位置へ移動すれば二重の意味役割をになうことになり、これは  $\theta$  基準 ( $\theta$ -criterion) (Chomsky 1981: 36) に違反するので許されない。

- (3) a. England was conquered
- b. *e* was conquered England
- c. England was conquered *t*
- d. \*It was conquered England

*conquer* はその目的語位置に独立変項 (argument) が存在していなければならないので、b. は a. の D 構造である。しかし *England* はこの位置では格を付与されないので格フィルターにより、どうしても *e* の位置に移動しなければならない、c. は移動による S 構造である。かりに *e* に虚辞の *it* が入っても d. のように非文になる。受動分詞 *conquered* は形容詞的の性質をもち、格付与能力を喪失している。さらに動詞 *conquer* は主語に  $\theta$  役を通常付与する性質をもつもので、かりに虚字的な *it* が文頭にきて \*It conquered England となっても非文である。このことから能動文と受動文を比べると、(3) a. から明らかかなように主語  $\theta$  役が欠如しているので、受動文では  $\theta$  役が一つだけ少ないわけである。しかし次の a. ではこれが明示的に示されている。

- (4) a. England was conquered by the Normans
- b. The Normans be conquered England by *e*

かりに *the Normans* が D 構造において主語位置にあったと仮定すると、NP

移動によって *by* の complement 位置に移り、次に *England* が *the Normans* のあとの空位置に動くことになるわけであるが、その場合 *be conquered* は直接主語役を *the Normans* に付与するのでなければ、独立変項が  $\theta$  役を欠くことになる。しかしこうなると、D 構造(3) b. は  $\theta$  基準に抵触することになるのでその仮定は成り立たない。*by the Normans* は最初から D 構造にあったことになる。移動は受動分詞の語彙的特性が引き金となったもので、動詞が受動分詞の形態をとった結果生じた付随的現象といえることができる。格フィルターは NP に適用されるものであるから、受動分詞のあとに格を必要としない節補文がくる時は、移動は行われなくてもよい。

(5) It is said that the mayor will resign

受動文は、格フィルター、格付与能力、非主題的位置といった言語の一般的概念に依存するものであるから、外見的には移動という操作をとるにせよ、従来のような各言語時有的、ばらばらな変形分析の方法を GB 理論では排除する。*seem, appear* のような、一般に繰り上げ動詞と呼ばれるものも格付与能力はなく、非  $\theta$  位置をもつ点で受動分詞と類似した性質をもつ。次例では、非定形節の主語は AGR を欠いているので、そのままの位置では *a storm* に格は付与されず、格フィルターに抵触するので非  $\theta$  の主語位置へ移動する。

- (6) a. *e* INFL seem [*a storm to be approaching*]  
 b. A storm seems [*t* to be approaching]

2 次に *believe, want, persuade, try* について考察する。

- (7) a. I believe [*John to be an atheist*]  
 b. I believe that John is an atheist  
 c. John is believed to be an atheist

従来は NP *John* を補文の主語位置から母型文の動詞の目的語位置へ繰り上げ変形を適用して b. から a. を派生すると説明されてきた。GB ではこの方法は二つの理由から斥けられる。(i)動詞の後の NP と非定形節とが構成素を形成

しない。ii)移動は非主題的主語位置へのみ可能であるから、主語のNPを補文節から、VP内の目的語位置へ移動することは $\theta$ 基準に抵触する。つまりGBでは、John と to be an atheist ((1)の I' に相当する)は実際問題として節を形成すると仮定する。このことから、GBではいわゆる目的語位置への繰り上げ構造においても、移動変形はかかわっていないとし、統語のすべてのレベルで(7)a. が想定されている。ところで、非定形節の主語に格を付与する仕組みはないのであるから、このままでは John は格をもたず、格フィルターに違反することになる。それにもかかわらず、(7)a. が適文であるのは、believe タイプの動詞の特性として、S-boundary を越えNPを統率し、それに格を付与することができるからである。Chomsky (1981: 50) はこれを例外的格標識付与 (Exceptional Case Marking—以下 ECM と略す) と呼んでおり、believe と補文の間には統率の絶対的障壁となる  $\bar{S}$  が削除されて、Sだけが介在すると考えられている。Sは障壁にはならない。従って(7)a. は非文とはならず、次例の示すごとく、一般に認識動詞、断定動詞の類にこの特性をもつものが多い。

- (8)a. I knew [there to be no escape]
- b. I'd never imagined [anyone to be so beautiful]
- c. The doctors declared [the president to be fit]
- d. The police reported [the traffic to be heavy]

(Radford: 358)

再び(7)a. にもどって、John と to be an atheist が構成素を形成して、I believed [[NP John] [to be an atheist]] となるのであるが、意味の上でも、believe の目的が John ではなくて、John to be an atheist 全体であることは、われわれの胸中で I believe John と I believe that John is an atheist が同時に成立することは通常あり得ないことから明らかである。これは(8)の各例についても同じである。ECMによってNPを統率し、格付与を行なうbelieveは受動分詞の形態をとれば、既述のように、格付与能力をすべて喪失するわけであるから、(7)c. の示すように、NP John は格フィルターによって移動する (cf. \*It is believed John to be an atheist)。believe タイプの動

詞は、また、前置詞的な補文化子 for をとらない。

- (9) a. \*I believe [for John to be an atheist]
- b. \*I knew [for there to be no escape]

それは、通常  $\bar{S} \rightarrow \text{Comp} + S$  と展開されて、補文化子は  $\bar{S}$  の構成要素であるけれども、この種の動詞はその特性として  $\bar{S}$  削除をもつことから、補文には原則的に補文化子が介在しないと考えられるからである。

- (10) a. I wanted [John to win]
- b. I persuaded [John to win]

(10) の a. b. は外見上は NP to VP という類似した形をとっているけれども、次の例によって、顕著な違いが生じることがわかる。(cf. Lasnik: 13)

- (11) a. I wanted it to rain
- b. \*I persuaded it to rain
- c. I wanted the arrow to hit the mark
- d. \*I persuaded the arrow to hit the mark

(10) a. want の意味上の目的語は John ではなくて、意味上 John's winning ということであるから、want は補文に単一の  $\theta$  役を付与するのに対して、persuade は John と to win の二つの complement をとると言える、これは、

- (12) a. \*I wanted John that he should win
- b. I persuaded John that he should win

のようにパラフレイズができるか、できないかで明らかである。別の言い方をすれば、persuade は 3 項述語 (three-place predicate) であるのに対して、want は 2 項述語 (two-place predicate) であるということで、この点では want は believe に似ていると言えよう。(11) b. の it は虚辞的で独立変項でないから、complement にはなり得ないし、同じく d. では意味上の選択制限から求められる  $\theta$  役をになうことができないことでその非文性が説明できる。

- (13) a. I tried to win  
 b. \*I tried John to win  
 c. \*I tried it to rain  
 d. \*I tried the arrow to hit the mark

非定形節の主語は通常格の付与される位置ではないので、その位置におけるNPが音形をもってあらわれることはない。一方 win はその  $\theta$  構造から主語を必要とするけれども、これが語彙として表面にあらわれると b. のように非文になる。want や believe の場合は  $\bar{S}$  削除により、ECM が作用するが、try はその語彙的特性に  $\bar{S}$  削除をもたない。John tried [PRO to win] のように抽象的な代名詞的要素 PRO があらわれて、PRO は try にコントロールされる。すぐ上で、want は believe に類似していると述べたが、それは普通の節の場合  $\bar{S}$  節点を含むのに対して、これらの動詞では  $\bar{S}$  が削除され、ECM が働いて S だけを含む例外的な節となり、節中の NP は後の動詞の主語としてというよりも、上方の動詞の目的語のように振舞う性質をもっている点でそうなのであって、I am eager for John to win の John についても意味上同じことが言えるのである。しかし、両者を比較すると次のように相違がみられる。

- (14) a. I want to win  
 b. \*I believe to be a winner  
 c. \*I want myself to win  
 d. I believe myself to be a winner

believe は ECM が義務的に働くので非定形節には主語の具現を必要とし、従って b. は非文である。さらに、照応表現 (anaphor) はその統率範疇内で束縛されていなければならないという束縛原理によって、d. は適文になる。(11) c. では ECM が作用して、hit the mark の付与する  $\theta$  役をになう主語は音形をとってあらわれるとしてきたが、(14) a. では、(13) a. の try のように、空範疇の一種である PRO としてあらわれ、主節の主語にコントロールされる。PRO は統率されてはならないという空範疇原理に従うので、かりに基底に for の存在を想定して、\*I want [for me to be present] や、\*I want [for

to be present] のような構造を派生しても, for は前置詞としてあとの語を統率するのであるから非文になる。音形のある NP のあらわれる位置には PRO はあらわれないし, またその逆も成り立つわけであるから前出(13) b. c. d. の非文性も明らかであり, I believe [PRO to be ill] のような S 構造も考えられない。ECM の立場から言えば, 結局, believe では義務的に適用されるが, want, wish については随意的に適用されるということになるであろう。

3 ECM に関して, want (hate, like) の類はその適用を随意的に許し, persuade (convince), try (attempt) はその適用を許さず, believe (consider) はその適用を義務的に受けることを述べてきたが, さらにそれらの受動文についてふれる。結論的に言うなら, persuade は受動文については文句なしに可能であり, believe も既述の通り可能であるが, try, want については passive は不可能である。

- (15) a. John was persuaded to win (by Mary)
- b. John was believed to be competent
- c. \*John was tried to win
- d. \*John was wanted to win

try は  $\theta$  役をになう目的語をとらないし,  $\bar{S}$  削除を受けないという語彙特性のために, 受動分詞の形態をとっても, D 構造で移動する NP を欠いているのであるから, c. のような受動文は非文になる (cf. \*John was tried [ $t$  to win]). a. については, すでに(12)でふれるところがあったように, persuade は 3 項述語で 1 次的 NP 目的と 2 次的な不定詞の  $\bar{S}$  目的を取り, その構造は Mary persuaded John [[PRO to win]] で示することができる。d. の非文性はどのように説明されるだろうか。GB の境界理論の中心をなすものに下接の条件 (Subjacency Condition) があって,  $\alpha$  移動は二つ以上の境界節点を越えて要素を移動してはならないという局所性を定めた理論である。(15) d. の D 構造は概略,

- (16)  $e$  was wanted [(for) [John to win]]

が想定される。これから d. を派生するためには、John を *e* の空位置に移動しなければならないが、そのためには二つの境界節点  $\bar{S}$  と *S* を越えなければならないので、これは下接の条件に反することになる。さらにもう一つの非文の理由というのは、*S* 構造 John was wanted [for [*t* to win]] において、John 移動のあとの痕跡 *t* が適正に統率されていないからである。なぜなら、for は統率子であるけれども、適正な統率子でないので空範疇原理に反している。かりに John was wanted [for [*t* to win]] に  $\bar{S}$  削除が適用されるとなると、そして for が *S* 構造で存在していない場合は、痕跡 *t* が受動分詞 wanted に適正に統率されることになるので、(15) d. は適文になってしまう。故に受動分詞は  $\bar{S}$  削除を許さないとしなければならない。すでに述べたごとく、I want PRO to come の場合は  $\bar{S}$  削除は許されないものであった。なぜなら、もし許されるなら、PRO は主節の動詞に統率されることになり、空範疇原理 ECP (Empty Category Principle) に違反する (cf. Chomsky 1981: 250)。さらに、次のような場合はどうであろうか。

- (17) The man (who) you said {you want [[*t* to meet Bill]]} has disappeared

すでに言及したように、say, tell, think など断定動詞のすぐ下の  $\bar{S}$  は境界節点として数えられないが、want のあとの  $\bar{S}$  も削除されないと wh-句の移動にあたって、下接の条件に違反することになる。 $\bar{S}$  削除に関し、want (wish, prefer) には随意的に適用されると述べたのはこのような事例が存在するからである。

4  $\bar{S}$  削除について、それを語彙項目で規定できるならば投射原理によって統語の各レベルで保持されることになる。しかし、上で触れたように、want や expect のように随意的に適用される場合には、状況によって異なってくるのであるから一律に示すことができないことになり、それぞれの語彙的特性ということになる。

- (18) a. Who is it possible (that) John will marry  
b. \*John is possible to marry Mary



c. It is possible to marry Mary

(18) a. では、wh-句がD構造における marry のあとの位置から文頭へ移動するわけであるが、その際やはり  $\bar{S}$  が削除されないと、下接の条件と ECP に違反することになる。後者については、possible が適正な統率子であっても、 $\bar{S}$  を越えて痕跡  $t$  を統率することができないからである。しかし possible は  $\bar{S}$  削除を引き起こすと規定すると、実際に反して b. が適文になり c. が非文になってしまう。なぜなら、b. は John is possible [ $t$  to marry Mary] という S 構造で、 $t$  は possible に適正に統率され、John は格を付与されており、移動においても下接の条件に反していないので、このままでは適文になってしまう。c. も It is possible [PRO to marry Mary] で PRO は possible に統率される位置にあることになり、ECP に違反して非文になってしまう。

(19) a. John is likely to do this

b. \*John is crucial to do this

c. It is crucial to do this

likely や certain はいわゆる繰り上げ述語とよばれるもので、その語彙特性として  $\bar{S}$  削除の適用をうける。従って、a. の D 構造は  $e$  is likely [John to do this] であって、John は格フィルターで  $e$  の位置に移動するが、移動に際しても  $\bar{S}$  を越えないので下接の条件に反しないし、そのあとの痕跡  $t$  は likely に適正に統率されているから問題はない。b. の crucial は  $\bar{S}$  削除をうけない。S 構造の John is crucial [[ $t$  see this]] をみると、John は  $\bar{S}$  を越えて移動しており、さらに  $t$  は  $\bar{S}$  が障壁となって crucial に適正に統率されていないので空範疇の原則に反しておりアウトになる。 $t$  と PRO は相補分布的な立場にあるので、It is crucial [[PRO to do this]] は適文であり、 $e$  の位置は expletive it によって占められている。

(20) a. It is quite probable that John will win

b. It is quite likely that John will win

c. \*John is quite probable to win

d. John is quite likely to win

probable と likely は語義的には類似しているけれども統語的には上例のごとく異なった振舞を示す。いわゆる主語繰上げが可能か否かは  $\bar{S}$  削除の可能性とかがわってくるわけであるが、これも、語彙特性として、それぞれの語彙項目で可能な限り示されることになる。

以上、NP 移動を中心に、それとかかわりをもってくる問題を取りあげたが、結局、移動は格理論、 $\theta$  理論、境界理論といった各モジュールの相互作用によってその適不適がきまってくる。従来の特定言語に限られた、言わばその場限りの一般性を欠いた変形や制約の概念は破棄され、あるいは修正され、一般性、普遍性のある原理原則の確立に目標がおかれている。本稿では、 $\bar{S}$  が、実際に移動の barrier であるのかどうか、またどういう状況の下で  $\bar{S}$  削除が随意的であり、義務的であるのかの問題が残されている。Chomsky (1986 b) には、

Can CP be an inherent barrier to government? Here too the answer appears to be negative.

とあるが、この課題については稿を改めて取り上げることにしたい。

## References

- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris.  
 Chomsky, N. (1982) *Some Concepts of Theory of Government and Binding*, MIT.  
 Chomsky, N. (1986a) *Knowledge of Language*, Praeger.  
 Chomsky, N. (1986b) *Barriers*, MIT.  
 Cook, V. J. (1988) *Chomsky's Universal Grammar*, Blackwell.  
 Horrocks, G. (1987) *Generative Grammar*, Longman  
 Jacobsen, B. (1986) *Modern Transformational Grammar*, North-Holland.  
 Lasnik, H & J. Uriagereka. (1988) *A Course in GB Syntax*, MIT.  
 McCloskey, G. 'Syntactic theory' in *Linguistics: The Cambridge Survey I* (1988) F. J. Newmeyer (ed.), Cambridge.  
 Radford, A. (1988) *Transformational Grammar*, Cambridge.